

30 大江雲沢と中津医学校について

川 寫 眞 人

中津医学校についての初めての記載はモラロジの創始者で中津出身の広池千九郎の「中津歴史」に見られる。

「明治四年十二月小倉縣特二中津ノ大江雲沢等四人ヲ挙テ医学校取立方ヲ命ジタリシガ是ニ至テ医学校及病院ヲ片端町ニ開設セラレ大江春水ヲシテ其教頭トシ藤野玄洋ヲシテ院長トシ年々米二百二十五俵ヲ資シ之ヲ維持ス」

中津医学校の前身は中津医学館である。嘉永二年(一八四九)三月、辛島正庵を筆頭に中津の医師たち十名が長崎に痘瘡の病苗をもらいに行き、中津で種痘を行った。医師達の献身的な努力に町の人々は大いに喜び、小松屋義兵衛などの有力者の寄付により、藤野玄洋の父親の藤野啓庵などが中心になって上勢溜に医学館が文久元年(一八六一)に設立された。この医学館は中津とその周辺の医

師たちの集会所や種痘を実施する場所として利用されていたが、医学生の教育を行う場所でなかった。中津の医師達は医師になるためには華岡塾や適塾などの遠方に留学するか、辛島、大江、村上など代々続いている藩医の私塾で経験的に医学を学ぶしかなかったので、中津に医学校を設立することは久しく望まれたところであった。

医学校取立方となった大江雲沢は、文政五年(一八二二)十二月八日中津の鷹匠町に出生、範治、達義、達儀とも呼ばれた。大江家は代々の藩医を勤めてきた医家で寺町の本伝寺には玄仙、文明、元泉、玄明、雲沢の墓がある。雲沢(雲澤)は号である。天保十二年(一八四二)、華岡医塾の大坂分塾(合水堂)に入門し、華岡良平(鹿城)に学んだ。大江家には華岡青洲の画像、青洲所診画像が保存されており、乳癌の手術図や腫瘍の所見が画像として描かれている。

雲沢入門帳には萩、秋月、阿波、肥後からも四十四名の入門者があり、雲沢の声望の高さを示している。雲沢の妻は村上家八代の春海の娘でイツという名前である。雲沢は中津藩医としても重職にあり、城からの招請状が

二通残されている。

雲沢の著書には『雲沢先生疾口授』、『ばい瘡經驗方』がある。後者の中で文献をうかうか信じて医療の失敗をしたことが記載されており、よくよく経験と文献を読むことを重ねて、周到なる診療をすべきことを書いてある。さらに後者の付録には雲沢の医学哲学(医訓)が記述されている。特にその医則第一には「医は仁ならざるの術、勤めて仁をなさんと欲す」と書かれている。第二則、実中に虚を察し、虚中に実を察す、医はなおいくさのごとし、第三則、病に対して利を図り、名を好み、インチキをしてはならない。己の蓄財のためではなく、天地大自らの命の営みを助けるためのものである。第四則、寇に矛をとり武を奪うを知るも、これを撫安するを知らず、火には水をもってこれにむかうを知るも、火をもって火を制することを知らない。根本を治めて末節を処理し、病気の原因を知って、その症状に対処する。魚を取る網を使わないで、魚を取る方法を知っている人物でなければ、共にこの仁術を語ることはできない。

これらの雲沢の医訓は中津医学学校の基本方針となった

ものであろう。

中津医学学校の教科書は『病学通論』などが残っているが、カリキュラムやその後の消息は不明である。明治十二年(一八七九)に大分医学学校が藤野玄洋などの努力で設立されたので、その前後に廃校になったものと考えられる。

雲沢の息子の億司(範敏)は大分医学学校に入学しており、息子にあてた情感細やかな手紙も残っている。雲沢は明治三十二年十月四日、七十八歳で死去し、本伝寺に埋葬された。法名は清亮院釋明微居士とされた。

(医療法人玄真堂川島整形外科病院)